

ヒラズハナアザミウマに対する各殺虫剤の効果

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

各種作物において難防除害虫とされているアザミウマ類のうち、ミカンキイロアザミウマの薬剤感受性の特徴については普及に移す技術第76号及び77号で示した。今回、これまで薬剤感受性が比較的高いと考えられてきたヒラズハナアザミウマについて、採集場所や作物の異なる個体群を用いて薬剤感受性検定を実施したところ、薬剤間や個体群間で感受性が大きく異なる現象を確認したので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 供試薬剤のうち、ヒラズハナアザミウマのいずれの個体群に対しても殺虫効果が高かった薬剤はDDVP75乳剤、トクチオン乳剤、アーデント水和剤、ダントツ水溶剤、アフーム乳剤、コテツフロアブル及びスピノエース顆粒水和剤であった(図-1)。
- 2) ネオニコチノイド系殺虫剤のうち、モスピラン水溶剤、ベストガード水溶剤、アクタラ顆粒水和剤及びアルバリン顆粒水溶剤については、個体群間で殺虫効果に大きな差が認められた(図-1)。

3 利活用の留意点

- 1) 特にネオニコチノイド系殺虫剤は個体群間で殺虫効果が大きく異なったのは、本種の薬剤感受性について個体群間で変異が大きいか、あるいは薬剤抵抗性の発達の一過程を示している可能性が高い。そのため、本種の防除における薬剤の選定は、使用履歴やその効果を確認して行う。
(参考：主なネオニコチノイド系殺虫剤はアクタラ顆粒水溶剤、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、バリアード顆粒水和剤、ベストガード水溶剤、モスピラン水溶剤である。)
- 2) 本種とミカンキイロアザミウマとの見分け方は普及に移す技術第77号で示した。

(問い合わせ先：宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部 電話 022-383-8123)

4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題及び研究期間 農作物有害動植物発生予察事業
平成 13 年～
- 2) 参考データ

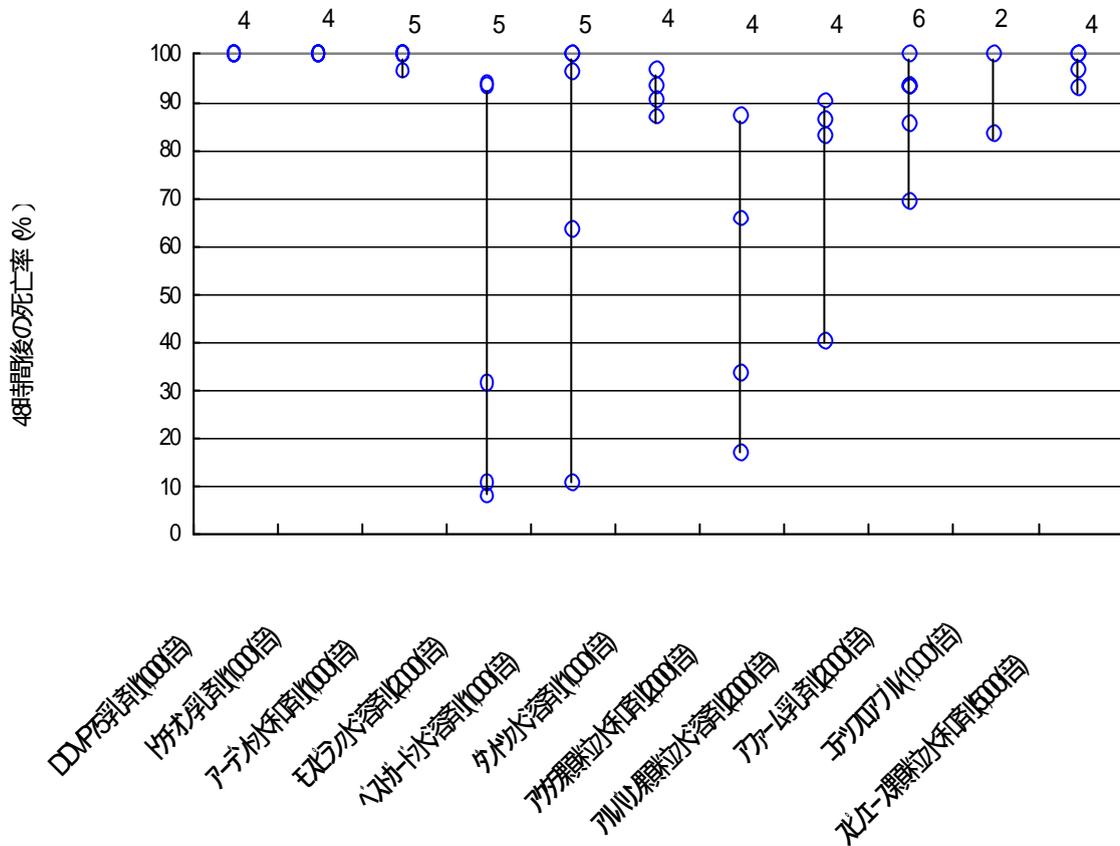


図-1 ヒラズハナアザミウマ雌成虫の薬剤感受性の個体群間差
各グラフ上部の数値は増設個体数を示す。各個体群の死亡率
縦ハ- : 死亡率の最高値から最低値の範囲 202003年

3) 発表論文等

第 4 8 回日本応用動物昆虫学会 (2004 年) にて発表